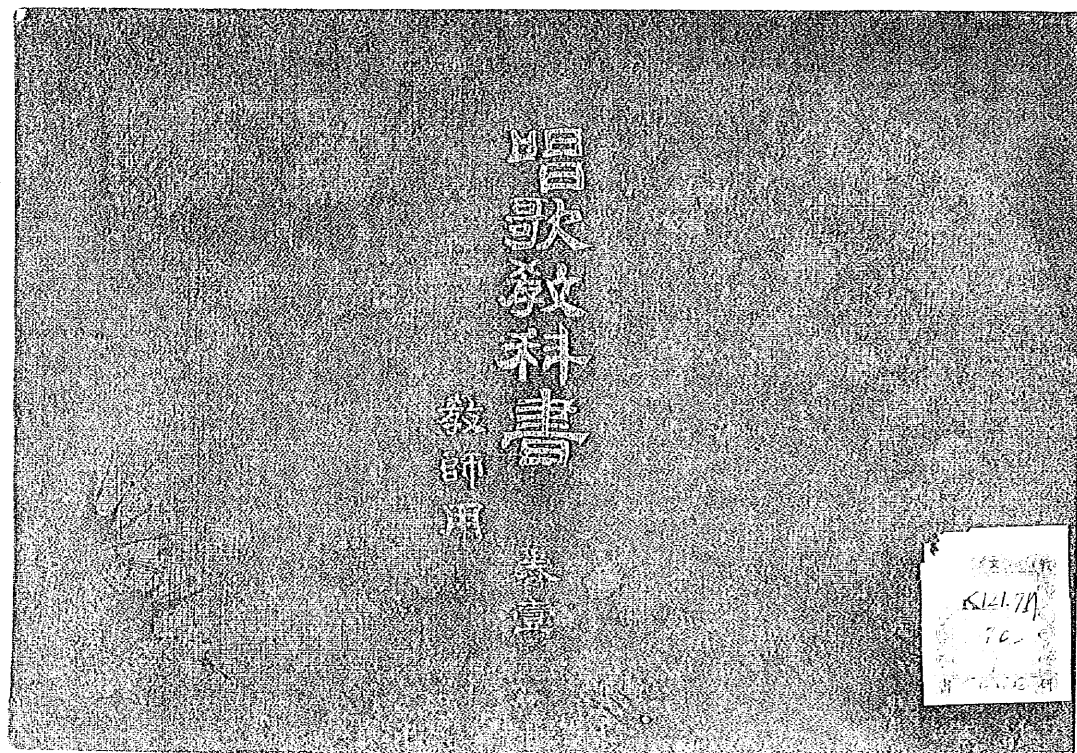




K121.74

7a

1

共益商社編

明治
38 4 6
丙交

明治參拾五年七月廿五日
高等小學教科用
文部省檢定
唱歌教科書
卷一
教師用

共益商社樂器店藏版

緒言

弊社晨に善良なる唱歌教科書の編纂を希圖するや、先づ在京知名の音樂及文學の數大家に乞うて、該書編纂上の審査監督の事を依囑し、同時に廣く書を全國各地なる専門の諸先生に致して、諸地方に於ける該科普及上の狀況を始め、一般生徒の嗜好、歌曲難易の程度、旋法の種類、音域、歌曲の品題、分量、及び其排列の順序、教授の方法、其他編纂上要用なる條目に付て、委細の經驗注意等を寄せられん事を乞ひ、之を統計して、先づ編纂上大體の順序方法を定め、品題を選び、以て文學の大家に之が作歌を依頼し、再び之を各地の諸先生に配布して、其作曲を仰ぎ、集まれるもの數百曲の中に就て、更に前記編纂監督の任に當られたる諸大家の、最も懇切丁寧なる審議取捨を経、茲

に着手以來幾多の歲月を閲して漸く此の編は成りたり、されば本書は、其編纂上最も精密の手續きを履みて生れたるものなる事を信ずるものにして、こゝに其歴史を序すると同時に、謹んで之に干られたる諸大家に向つて、深く其好意を陳謝すと云爾。

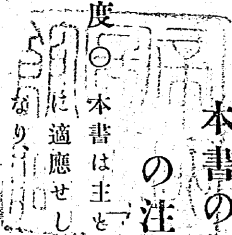
明治三十五年四月

本書の特色及び使用上

の注意

程

度



本書は主として高等小學四學年間の課程に適應せしむる目的を以て編みたるものなり。

(されば、本書の第三卷第四卷及び其他の幾分は、また中學校及び高等女學校にも適用するを得るものとす。)

歌曲
順

○

本書に於ける歌曲排列の順序は、斯道の諸大家の最も精密なる審査を経て成れるものにして、系統正しく漸次簡より繁、易より難に進めるは勿論、遅き曲と早き曲と、並に勇ましきものと優しきものと、の配合、音域の廣さ、題目並に歌想、曲想の程度、季節の順序、及び各學期間に教授すべき歌曲の數等、凡て最も適切なるべき様編まれたるものなり、なほ曲を追うて、樂譜上新記號の現はるる毎に、他の注意すべき諸項目と共に、必ず之を、演奏注意欄内に記述したり、されば特別の事情ある場合に非れば、妄りに之を取

捨變換する事なく、たゞ全々所載の順序のまゝ教授を進行すれば足るものとす、

但し祝日大祭日等の唱歌は、本篇以外別に練習を要すべきものなれば、之を行ふべき學期間の曲数は、豫め其割合を以て排列しあるものと知るべし、なほ毎曲必ず充分生徒の熟練するを待って後、次の歌曲に移るべく、又常時既習曲を復習すべき事は論を俟たず、

高尚なる歌曲

○三四年生用の歌曲中には、在來の唱歌集の程度に比して、頗る高尚なるもの無しとせず、されども、もと本篇の歌曲は、悉皆これ本邦人の作にして、特に最も我兒童に適切なものをのみ、選み集めたるものなれば、彼の外人の作の我國情に叶はざるものゝ類を含まず、されば、一二年生より本教科書の順序により、正當の練習を積みたるものは、自然これら高尚なる歌曲をも見事に唱謠し得て、よく其趣味を會得し得るに至るべきを信ず、彼の常時徒らに兒童の容易く擬唱し得らるゝものをのみ、多々注入するが

如きは、斯の科の教授上、善良の結果を擧ぐべき所以に非ず、

但し樂曲教授には、必ず樂譜を用ゐ、視覺上の智識をも應用せしめて、意識的練習を爲さしむべき事勿論なり、

〔附記〕本書編纂に當り、一般地方の専門家より聽くを得たる意見の大多數は、一二年生には畧譜、三四年生には本譜を用ゐしむるを以て適當となせり、

調子

○本篇に於ける樂曲は、其自然の性質と、兒童の音域とを考へ、夫れゝ適當の調子を以て記載しあるものなれば、妄りに移調變換する無からん事を望む、

但し曲により、一音内外の區域に移し得べきものは、演奏注意欄内に之を附記したり、

曲の想

○歌章に意義あるが如く、樂曲にも亦各其想あるものにして、勇ましきあり、優しきあり、廣大なるあり、輕快なるあり、其様一ならず、蓋しこの想こそ、唱歌上最も緊要なる條件にして、これ無ければ樂曲は全く死物と成

り了るべし、本書は毎曲首に必ずこの曲想を附記し、なほ曲によりては、演奏注意欄内に於て更らに之を説明したれば、先づこれに依りて曲趣を悟り、其の心を以て唱歌せば、幾庶くは漸次美的興味を會得するに至らん、なほ特に強弱記號及び發想記號を附記したる曲にありては、充分之に留意して、善く其曲の眞趣味を發輝せん事を望む、

但し先づ調子及び拍子に熟達して後、強弱及び發想の練習に及ぶを、正當の順序とす、茲に本書に使用したる記號の一般を説明すべし、

<i>pp</i>	最も弱く
<i>p</i>	弱く
<i>mp</i>	稍弱く
<i>mf</i>	稍強く
<i>f</i>	強く
<i>ff</i>	最も強く
<	漸々強く
>	漸々弱く
<i>rit</i>	漸々遅く

速度

○ 樂曲の速度は、また曲想と大關係あるものなれば、其緩或は急に失する事無からん爲め、毎曲必ず拍節機の度數(ニ)を附記

拍節機

して其速度を明示し、なほ一曲中に特別の緩急あるものは、演奏注意欄内に於て、更に之を述べたり、

但し新に教授せんとする樂曲は、豫め拍節機に依りて其拍子の速度を計り試み、よく其曲趣を會得し置くを善しとす、又若し教授に際して拍節機を使用する事あるも、曲首三四小節間にのみ之を用ゐれば足れり、一歌曲を通じて拍節機と共に唱歌するが如きは、機械的に流れて却て曲想を失ふの憂あるべし、

〔附言〕從來唱歌教授の通弊として、樂曲の速度多くは緩に失するの傾あるに如たり、

發聲法

○ 聲音は唱歌上唯一の材料にして、發聲法の善惡は直ちに歌曲の美醜に關す、されば教師は常時兒童の發聲に注意し、能ふべきだけ善美なる聲音を使用せしむる事を怠るべからず、吸息法も亦唱歌上重要な一條件にして、こはまた呼吸機の發育に關する事大なり、本篇樂譜の上部に記したる、V記

號は即ち吸息の箇所を示したるものなり、
〔附言從來該科の教授には、暴聲を用ゐて
絶叫するをのみ活潑なる唱歌法と誤解
するの弊あるが如し、くれぐれもこの項
に注意あらん事を望む、

教授上の説明の要

○ 歌詞の意味に付ては、毎歌章の末に大要之
を解釋したるが、教師は先づ歌曲の題目、歌
意、曲想等により、善く他科との聯絡を考へ、
又既習歌曲との類似点及び差点等を視適
宜に生徒と問答し、或は善く其意を説明し
て、充分兒童の興味を喚起し、且つ教授の聯
絡を計らん事を要す、

注意欄

○ 以上記載以外の條項は、各曲に注意欄を附
して、一々其内に之を記述したれば、毎曲先
づ之を熟讀して、後教授に従はん事を望む、
○ 第三卷及び第四卷には、卷末に女生徒専用
曲を添へたれば、適宜に之を學期間に配當
して教授すべし、

女生徒専用曲

唱歌教科書卷壹 教師用

目次

第一學期	一 櫻	二 頁
	二 勸學	四 頁
	三 祝ひ日	六 頁
	四 學びの園	八 頁
	五 朝起	一〇 頁
	六 雲雀	一二 頁
	七 虹	一四 頁
第二學期	一 休みの鐘	一六 頁
	二 日本三景	一八 頁
	三 虫	二〇 頁
	四 運動會	二二 頁
	五 日本男兒	二四 頁
	六 小犬	二六 頁
	七 一月の遊び	二八 頁
第三學期	一 母のおもひ	三〇 頁
	二 竹馬	三二 頁
	三 雪達磨	三四 頁
	四 航海	三六 頁
	五 時は黄金	三八 頁
	六 進軍	四〇 頁
	以上	

さくら

二

かすみのころも、ぬぎかけて、
 さくらのほろあき日に、にほふなる、
 ぬみのくちびる、うるはしや、
 (二) ひらきつゝ、

かすみのきぬを、まとひかけ、
 ゆふ日なゝめに、かざすなる、
 さくらの花は、うるはしや、
 ぬみのまゆずみ、こまやかに。

一の歌は櫻に朝日が照すさま二の歌は夕日が照すさまをよんだのである。共に花を人にたとへ霞を衣服にたとへたのである。
 あさひににほふ日にはふとは香ではない。此處では朝日に照らされて色のあざやかなこと。
 ぬみで笑ひをふくんで居ること。
 かざす 髪につけて飾ることだが此歌では日に照されて居るのをたとへたのである。
 まゆずみ 女の形をきれいにいかしたもので眉

意注奏演

○常曲は四分の四拍子なり、四分の四拍子に於ける樂曲の各小節は總て第一拍強、第二拍弱、第三拍中強、第四拍中弱(第二拍より弱し)の順序を以て進むを其本體とす
 ○第二段及第四段の第二小節に於ける第三音符5音は4音に誤唱せられ易し
 ○曲中二分音符及附點二分音符は往々其價值だけ延長せずして進むの弊あり注意を要す
 ○全曲凡て滑かに唱ふべし

櫻

温和(♩=112)(へ調四分ノ四拍子)

三

か 1 1 2 | 3 2 1- | 5 5 5 3 | 2- 0 |
 か ス ミ ノ コ ロ モ ス ギ カ ケ テ
 三 三 2 | 1 1 5 5 | 1 1 2 2 | 3- 0 |
 ノ ボ ル ア サ ヒ ニ ニ ホ フ ナ ル
 5 5 6 6 | 5 5 3- | 5 3 3 1 | 2- 0 |
 サ ク ラ ノ ハ ナ ハ ウ ル ハ シ ヤ
 三 3- 2 2 | 1 1 5 5 | 1 2 3 2 | 1- 0 ||
 エ ミ ノ ク チ ビ ル ヒ コ ラ キ ツ ツ に

祝ひ日

六

すめ^(一)の鳴く^(一)庭なる松風^(一)八千代ときこえ、
たのし^(二)けふの^(二)たのし^(二)祝ひ^(二)

朝日の御旗は、門なみなびき、
唱歌の聲々、里ごとみてり、
たのし^(三)けふの^(三)たのし^(三)祝ひ^(三)

いざぐわれらも、手に手をととりて、
いはひて遊ばん、うれしきけふを、
たのし^(三)けふの^(三)たのし^(三)祝ひ^(三)

門なみな家ごとに。

意注奏演

○前曲に比しては其速度頗る早し(同様の音符なれども)拍節機の度数
(11/8)に依りて其速度を定むべし
○此曲には高き音多し、發聲法に注意し決して叫聲を用ひしむべからず、
一調若くは變方調に移すも可なり
○二個以上の音符の符尾の鈎を結合したるもの(♪)はスラーあるものと
同一に見なして可なり其に極めて滑かに歌ふを要す
○常曲始めてノの記號あり、音聲の強弱に注意するを要す(強弱記號
の説明は巻首に出づ)

愉快=遅クナク(♩=152)(は調四分ノ四拍子)

祝ひ日

mf

1. 3 5 6 | 5 5 3 1 | 2. 3 4 6 | 5 5 3 0 |
一. スズメノナクコエヤチヨトキコエ
二. あさひのみはたはかどなみなびき
三. イザイザワレラモテニテヲナトリテ

5. 5 1 7 6 | 5 5 6 5 3 | 5. 1 3 2 1 | 2 2 5 0 |
ニハナルマツカゼバンザイトーヒビク
しよかのーこゑーごゑーさとごーみてり
イハヒテアソバンウレシキケフヲ

5 1 2 3 2 | 3 2 1 2 0 | 6 - 5. 1 | 3 2 1-
タノーシータノーシケフーノイハヒ
たのーしーたのーしけふーのいハ
タノーシータノーシケフーノイハ

學びの園

八

友と中よく、打ちつれだちて、
園に通ふもうれし、
いかに忘れる、
いかに忘れる、
花さく日まで、

友とたのしく、打ちつれだちて、
習ひし唱歌の、ふし遊歩の庭に、
いざや歌はん、もろ聲あげて、

學ぶも友と、へだてぬ窓よ、
遊ぶも友と、へだてぬ園よ、
園なる芝の、緑は常磐、
われらが中も、かはらじ常に、

此歌の意は同じ學校に通ふ朋友は學ぶにも遊ぶにも互になかといふことである。
學びの園學校を花園にた

園につみたる教への草葉
いかで忘れん花さく日まで
學ぶも友とへだてぬ窓よ
同じ學校の窓でまなぶ

演奏注意
○本曲は四分二拍子なり四分の二拍子に於ける樂曲の各小節は第一拍強、第二拍弱の順序を以て進むを其本體とする。
○本曲始めて符點八分音符及十六分音符を用う、拍子の比例に注意する所あるべし。

學びの園

快活=(♩=120)(と調四分ノ二拍子)

mf

The musical score is written for a single melodic line in treble clef, key of D major (indicated by two sharps), and 2/4 time. It consists of four staves of music. Below each staff are the corresponding Japanese lyrics and a numbered notation system (1-5) for singing. The lyrics are: 友と中よく、打ちつれだちて、園に通ふもうれし、いかに忘れる、いかに忘れる、花さく日まで、友とたのしく、打ちつれだちて、習ひし唱歌の、ふし遊歩の庭に、いざや歌はん、もろ聲あげて、學ぶも友と、へだてぬ窓よ、遊ぶも友と、へだてぬ園よ、園なる芝の、緑は常磐、われらが中も、かはらじ常に。

楽シゲニ(♩=144)(ハ調四分ノ四拍子)
mf

朝 起

オ キー ヨ ト ヒ ト ニ
あ さー ひ の ひ かー り
ヨ バー レ ス サー キー ニ
ト クー ト ク オ キー ヨ
と くー と く お きー よ
ハ ネー オ キー
は ねー お きー
ヨ
ア サー カゼー キー
ひ たー く るー ま で も
ワ ター レ ル エー
お きー で ぬ も のー は
ナ クー ト リ ノー
と りー に も お とー
モー シロ シ
ヒ とー な ら む

意注奏演

○強聲(アクセント)に餘り力を入る、事なく、動搖(ゆらく)するが如
き體に唱ふべし
○第三段第一小節に於けるノはアイデヤ、フォーテとて強ちに強からず、
たゞ強きこゝろを以て唱ふべきものとす、

朝 起

(一)

おきよと人に、よばれぬさきに、
とくとく起きよ、はねおきよ、
朝風きよく、わたれる枝に、
なく鳥の音も、おもしろし。
(二)

旭のひかり、さしてぬさきに、
とくとく起きよ、はねおきよ、
日たくるまでも、おき出ぬものは、
鳥にも劣る、人ならむ。
日たくる太陽が、
くのぼる。

雲雀

霞かすみをしのぎて、

雲井のそらに、

よふひばり、
ヒラヒラヒラヒラ、

高しや高しや、あひばり、

すがたはかくれて、
聲こゑ
ば
か
り。

つばさををさめて、
(二)
只ただひとおちに、

つはさををさめて、
只ひとおちに、
落ちてはのぼるよ、
あのひばり、
ヒラヒラヒラヒラ、
ピヨピヨピヨピヨ、

待て待てわれらも、
今
の
ぼる、

一の歌は霞をつきわけて雲の上に呼んで居る雲雀は我等にもこゝまで来いといふのか、高いなアあの雲雀は姿が見えないで聲ばかり聞えて居るよ、といふこと、二の歌は推して知るべし、

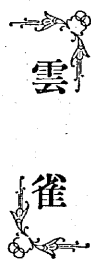
やよひばり やよはどれと
呼びかける語

呼や
びよ
かは
けど
るれ
語と

第三段第一節及第二小節ヒラ、ヒラの所は音とi音とを明かに區別せしむべし、但し此曲を教ふるに先ち豫めこの所だけ抜き出して練習せしむるも可なり

出して練習せしむるも可なり

雲雀



樂シク(♩=126)(は調四分ノ二拍子)

$$mf$$

mf

三

カ 5. 5. 5. 5. | 0 5. 5. 5. | 0. 5. 0 7 | 1. 5. 5. | 5. 5. 5. 5.
つ ば ミ ラ を シ ノ ギ テ ク モ キ ノ ソ ラ ニ コ コ マ デ は

コ 1. 5. 5. 5. | 6. 5. 6 7 | 1- | 2. 2. 5. 5. | 1. 1. 5. 5.
の ヨ ト カ ヨ プ ヒ バ リ ビ ヨ ビ ヨ ビ ヨ ビ ヨ

ビ 2. 2. 5. 5. | 1. 1. 5. 5. | 3. 4. 5. 5. | 0. 5. 6 7 | 1. 7. 1. 2.
び ら び ら び ら び タ カ シ ヤ ク カ シ ア ノ ヒ バ
よ び よ び よ お も し ら お も し ら や よ ひ ば

ソ 5- | 1. 1. 1. 1. | 2. 5. 5. 5. | 0. 5. 0 7 | 1- ||
リ ス マ ガ タ ハ カ ク レ テ コ エ バ リ
る ま が た わ れ ち こ ま の か ー



虹



清々ト(♩=120)(へ調四分ノ四拍子)

mf

三.

1. 2 3 1 | 5- 0 | 5. 6 5 3 | 2- 0 |

ア フ ギ ミ ヨ ヤ ヨ ト モ ヨ

1 - 2 1 | 4- 5- | 1 2 3 1 | 5- 0 |

オ ホ ゾ ラ ノ ニ ジ ノ カ ゲ

5. 5 6 5 | 5- 0 | 3. 3 2 1 | 2- 0 |

シ ョ ン テ ン ノ ハ シ ノ ゴ ト

1 - 2 3 | 6. 6 5 6 | 5 3 2. 3 | 1- 0 ||

カ カ ル サ マ ウ ツ ク ジ ヤ

ナ ビ く さ ま -

昇

あ ふ ぎ 見 よ (一) 虹

お ほ ぞ ら の や よ と も よ

か 天 の 橋 の 虹 の か げ

う つ く し や

あ ふ ぎ 見 よ (二)

お ほ ぞ ら の や よ と も よ

な び ぐ さ ま 旗 の 虹 の か げ

う る は し や

天にのぼるための橋か又は錦の立派な旗かのよーに見える虹の
さまをよんだのである。
橋のごとく
錦繡の旗ぬひとりにしき縮はぬひとり故に錦に

○滑かに且大々しく唱ふを要す
○凡ての附点二分音符を必ず其價值だけ延長する様、又第三段第一小節
の八分音符に、特に力を入れざる様注意を要すべし

やすみの鐘

十六

今こそをへたれ、

(一)

やすみをあらする、

まなびのわざ、

ちりん、ちりん、

鐘のひびき、

ちりん、ちりん、

ちりん、ちりん、

鞠なげ縄飛び、

(二)

いざいざなさん、

たのしくうれしき、

やすみのかね、

ちりん、ちりん、

ちりん、ちりん、

いさみてあそびで、

(三)

げんきをだせと、

しばしのやすみを、

興ふるかね、

ちりん、ちりん、

ちりん、ちりん、

遊ぶ時に遊ばないと勉むる時に勉められない。今やすみの時が来たぞ、遊べ、といふ意である。
しばししばらく。

意注奏演

○音符の上又は下に添へたる小點はスタッカトとして短く(音符の價値の半長ほどに)キレギレに唱ふ可き記號なり

○第一段及第二段の第二小節に於ける第三及び第四音符の間には自らなる切れ目ありと知るべし

▲本注意に於ける小節の數へ方は凡て始めに弱聲部あるものは之を除きて數に入れず次の小節より數へたり、以下皆之に準ず

快活=且ツ輕ク(♩=126)(と調四分ノ二拍子)

やすみの鐘

十七

五 | 一・ 七 一・ 二 | 三・ 二 一・ 四 | 五・ 一 三・ 一 | 二 〇 |

一. 二. 三. イ マ コ ソ ラ ヘ タ レ マ ナ ビ ノ フ ザ
イ ま り な げ な は と び い ざ い ざ な さん
イ サ ミ ラ ア ソ ビ ラ ゲン キ ラ ダ セ ト

二 | 三・ 二 一・ 二 | 一・ 七 四・ 五 | 六・ 五 三・ 二 | 一 〇 |

ヤ ス ミ ラ シ ラ ス ル カ ネ ノ ヒ ビ キ
た の し く う れ し き や す み の か ね
シ の シ ノ ス ミ ラ ア タ フ ル カ ネ

五 | 一 〇 三 | 一 〇 一 | 二 〇 七 | 一 〇 ||

チ リン チ リン チ リン チ リン
ち りん ち りん ち りん ち りん
チ リン チ リン チ リン チ リン

三三三
 トナチ (一)リ ミアブ ノひネ ヤざサ マンサ コよサ リリシ ナナナ ガわが アたア レセレ バババ
 マアイ ツー一 ヴェツ マのク コハシ シマシ マデマ ナオオ モしろ シシシ ロロロ ヤヤヤ
 シマコ 一ハ マツタ トのノ シマト マど一 トリリ テバキ ユタタ クママ フのノ ネズミ ハナヤ
 マタナ ツーミ カツマ セのヒ ウガタ 一や一 ケよカ クリア アホセン カラカ カミタ マツタ ホデ一

日本三景

十九

日本三景

十八

富とみの山やまより、ながむれば、
島しまと島しまとを、行いく。眞まことの帆ほ片はは、帆ほ。
成なり合あ山やまより、天あまの橋はし立たて、みわたせば、
松まつのみどりば、玉たまのおもしろや、
龍りゅうの宮みやより、みそらまで、
小舟こぶねをさし、ながむれば、
琥珀こはくのとりゐ玉たまのおもしろや、
波なみ間にうかぶ、蜃しんの氣き宮みや樓ろう。
松島は富山より眺めたるが一ばん佳く、天の橋立は成合山より見わたしたが一ばん佳い。天橋立は龍宮世界から天まで架けた橋の如く、嚴島は恰も海上に浮べる蜃氣樓のようなものであるといふこと。

月 牙 えわたる、 (一) 虫
 よすがら誰を、秋の野に、
 ふりだす鈴虫、聞きつけて、
 乗りくる駒の、くつわむし、
 ナ、ロヤナ、ロ、リン、
 秋風 さむく、身にしめば、
 はたおり虫も、いそがはし、
 つづれをさせとか、きりす、
 こほろぎさへも、なきしきる、
 ナ、ロヤナ、ナ、ロ、リン、
 秋の月夜に虫の鳴き聲を聞くとまつ虫は誰かを待つ如く鈴虫が
 ふりだす鈴の音を聞いてくつわ虫は馬にでも乗りてくる如くは
 たおり虫はいそがはしさうに機をおりきりくすなどは早くつ
 づれをさせといふよりであるとの意
 よすがら 夜どほし

○本曲は八分の四拍子なり各小節強弱の順序は四分の四拍子と同一なり
 (前出「櫻」の曲参照)
 ○()は延聲記號として音符の價值以外に其音長を延ばす(原價値の二倍は
 と)べきを示せり
 ○「も、ろや」の所より速度を緩め(前より倍ほど遅く)第二章は再び始め
 の拍子にて唱ひ出づべし
 ○P記號此曲に於て始めて用ひらる

愛ラシク(♩=168)(と調八分ノ四拍子)

虫

1. 3 5 5 | 6 5 4 3 | 1. 2 3. 4 | 3 2 0 | 1. 3 5 5 |
 ツ あ き サ エ ソ タ ー ル ア ー キ ノ ノ ニ ヨ ス ガ ラ
 三 3 3 3 3 | 3 3 3 3 | 3 3 3 3 | 3 3 3 3 | 3 3 3 3 |
 タ レ ー フ マ ツ ツ シ ー ヤ フ リ ー ダ ス ス ズ ー ム シ
 む し も い そ が は ー し つ づ れ を さ せ と か
 5. 5 6 5 4 3 | 2. 0 | 5 6 5 1. 2 | 3. 4 5 | 3 4 3 2. 2 |
 き り ぎ ー り ー テ こ は ー ろ ぎ コ マ ノ ク ツ ー フ ム
 き き り ぎ ー り ー テ こ は ー ろ ぎ コ マ ノ ク ツ ー フ ム
 P(オソク)(♩=66)
 1. 0 || 5 5 5 5 5 5 5 | 1 1 | 1. 0 ||
 シ ち ち ち ち ち ち ち リン リン リン

運動會

根法=(♩=120)(と調四分ノ二拍子)

二
う れ し き た の し き う ん ど ー か い の
こ ー こ ろ は ト ー ビ タ ツ ソ ラ ノ は ー リ た
ボンボンボンボン ボンボンボンボン タガヒに ナグアフ
ひらひらひらひら ひらひらひらひら カ ー タ ズ カ チ ト シ ル
ま け か は は たい ろ よ ー たり ぞ あ は る

意注奏演
○第三段第一小節及第二小節(ボンボン)は音程稍難し豫め抜き出して練習せしむる事曲「雲雀」の「ビヨビヨ」に於けるが如くするも可

心はとびたつその球ふのと雨方にかけたのふのと、球のと

よ た う う か た と う
ま が き 運 れ か が び 運 れ
り け ひ ヒ ラ た 動 し た け ひ ボン た 動 し
ぞ か に ヒ ラ つ 會 き (二) ぞ ろ に ボン つ 會 き (一)
あ は ヒ ラ の 空 た か な ボン そ た
あ は ら ヒ ラ の この ち は げ ボン ら この
は た そ ヒ ラ の し と げ あ、 の し
る ー い ふ 旗 ろ き る し ふ 球 ろ き
ろ は き は

運動會

日本男兒

二十四

よしや 百萬の 大軍も
 おの 身によしなき、
 山なすあだなみ、
 などかおそれん、
 きたへにきたへし、
 氷の やいば、
 このひとふりこそ、
 あだなすえみしら、
 などかひるまゝ、
 日本男兒

(一)
 大軍も
 身によしなき、
 山なすあだなみ、
 などかおそれん、
 きたへにきたへし、
 氷の やいば、
 このひとふりこそ、
 あだなすえみしら、
 などかひるまゝ、
 日本男兒

(二)
 大軍も
 身によしなき、
 山なすあだなみ、
 などかおそれん、
 きたへにきたへし、
 氷の やいば、
 このひとふりこそ、
 あだなすえみしら、
 などかひるまゝ、
 日本男兒

此歌の意は我等日本男兒はいかなる大軍にも奪はれぬ身の日
 本魂とまことに切れあちのよい日本刀とを持つゆゑに、いかなる
 敵にも恐れることはない、といふのである。
 よしやたとへ、
 山なすあだなみよせくとも 敵の大軍を山の如き波のおしよ
 氷のやいば 刀の如き、を氷にたとへたので冷やか
 ひとふり 刀を数へ
 あだなすえみしら あだ手むかひ
 をする賊ども

演奏注意
 ○勇大に唱はしむべし然かも決して叫ばしむべからず
 ○第二小節の小形音符は第二章の歌詞に當つべきものなる事、竹馬に於
 けるが如し

日本男兒



男マシタ(♩=126)(と調四分ノ四拍子)

三. 5. 5 3 1 | 2 1 2 3 2 0 | 1. 1 9 5 | 1- 0 |

ヨシヤ ヒヤクマンノ シ タ イグン ト モー

1. 1 1 2 1 7 6 5 | 1. 1 2 3 2 0 | 3. 3 3 1 5. 5 5 3 |

ウバフニヨシイ ナ マツサミシ オコ ノオヒ ノミフコ

2. 2 3 2 1 0 | 1. 1 1 3 2 1 7 0 | 5. 1 3 1 2 0 |

ソナヘタレレ ヤ マダナス アダミシ ヨセクトモ

5. 5 3 1 | 2 1 2 3 2 1 | 5. 1 2 3. 1 | 2 5 1 0 ||

ナドカ オソレン ニ ツボン ダンジ

二十五

小犬

二十六

古鞋くはくはへて、えたりがほに、

めぐりつはしりつ、狂くるふ小犬

いかにもたのしき、さまのみゆる、

われらも愉快えきに、いざあそばん

(二)

ひと聲こゑふた聲、いさみほえて、

すゝみつしりぞきつ、さわぐ小犬

いかにもうれしき、さまのみゆる、

われらもゆかいに、いざあそばん

古鞋くはは、ここではわらぐつのこと
得たりがほえをしたらと得意がほに

意注奏演

- 此曲を始むる前、豫習曲として其體の類似せる「朝起」の曲(前に出づ)を復習すべし
- 當曲の如く速度早く輕快なる曲は往々叫唱の弊に陥り易し注意すべし
- mp記號始めて用ゐらる

輕ク且ツ可愛ラシク(♩=176)(へ調四分ノ四拍子)

mf

1 1 3 5 5 | 6 5 3 1 0 | 4 3 2 1 3 | 6-5 0 |

フ ルー グ ツ ク ハ ヘ テ エ ター リ ガ ホ ニ

三 ひ ぞー こ ゑ ふ た こ ゑ い さー み は え て

1 1 3 5 5 | 6 5 3 1 0 | 4 3 2 1 3 | 2-1 0 |

メ グー リ ツ ハ シ リ ツ ク ルー フ コ イ ス

す すー み つ し り ぞ き つ さ わー ぐ こ い ぬ

mp mf

2 1 3 2 1 3 | 2 1 3 5 5 | 6 6 5 3 1 | 2 3 2 0 |

イ カー ニ モー タ ノー シ キ サー マ ノー ミ ユ ル

い かー にもー う、れー し き さー ま のー み ゆ る

27

1 1 3 5 5 | 6 5 3 1 0 | 4 3 2 1 3 | 2-1 0 ||

ソ レー ラ モー ユ カ イ ニ イ ザー ア シ バ ン

わ れー ら も ゆ か い い ざー あ そ ば ん



(二)

羽子つきあそびは、おもしろく、

みな來てつけよや、
はつ日のかげに。

紙^{たこ}をあげよう羽^ま子^こをつかうとよろこび遊ぶさまをよんだ歌である

東風東より吹く風

やりはこ
を三つ
あ互に
ふに
こ羽子
と子

はつ日のかげにふほこととあはり又一日の日さかぬ所をはいふの光をい

ころをいふ。こゝでは一月一日の日の光のさすところをいふ。

○此曲は四分の二拍子と四分の四拍子とより成れり音符の價值に注意すべし

○スタッカ記號ある音符に注意すべし(前出、休みの鐘參照)
○第一段第六小節の第一音と第二音の間及び第三段第四小節の第四音と

意注奏演

○凡て輕快に唱ふべく緩慢なるべからず

一月の遊び

一月の遊び

愉快=(♩=120)(に調四分ノ二拍子)

三三
 アツグヨカミダコミナキテアツグヨハコツ
 つげよや りはこみ なき て つげよ はこつ

mf
 ギーアッピハオモシロオモシロオモシロー
 —あそびは おも しろ おも しろ おも し—ろ

mp
 (四分ノ四) 5 5 6. 5 | 5 3 1 2 0 | 6. 6 1 6 | 6 5 1 2 5 5 6 |
 カ シ コ ノ ハ ラ — ヨ | コ — コ ノ ノ ベ — ヨ ミ ナ キ
 か し この に は — よ こ — この そ の よ み な き

(四分ノ二) 5- | 5 6 1 6 | 5- | 5 3 1 2 フ | 3- | 3 2 3 | 1 0 ||
 テ — アツグヨカ — コツフ ク — ソラゲ ニ
 て — つげよや — はこつ ひ の — うらげ に

母のおもひ

三十

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

(一)

教へたて、
後もなほ、
身をくたく、
たふとしや、
世にこえよ、
まよひそと、
ねぬ、
たふとしや、
心の上につけ、
母の恵を思ひや、
身も心も一人、
道にはゆるい、
兼輔朝臣

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

(二)

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

なでそだて、
人となりての、
こゝろのやみに、
母のめぐみは、
智恵も器量も、
あしき道にな、
こゝろのやみに、
母のなさけは、
生れおつるから大きく、
事に心をつくして育て、
人となるへ、
あしき道にな、
心のやみ

演奏注意
○發想記號に注意すべし
○第三段第三小節の第四音より第五音は特に滑かに歌ふべし

母の思ひ

調和 = (♩ = 88) (は調四分ノ四拍子)

mp

5. 5. i 7 | 6. 5. 5- | 3. 3. 2 1 | 5- 0 |

ナチ デも ソき ダテ テも フシニヘコ タえ テよ

mf

5. 5. i 7 | 6. 5. 5- | 3. 3. 2 3 | 1- 0 |

ヒト トナ リテ ノナ ノチモナ ホト

3 3 3 2 | 1 3 5- | 6. 6. 5 3 5 | i- 0 |

ココロノヤ ミニミヨクダニクね

i- 7 6 | 5. 5 3 3 | 5. 3 2 3 | 1- 0 ||

ハハノメグミハ タフ トシ ヤ

[illegible]

竹馬

乗れ 乗れ 乗れ (一)	千 萬 里 の 時 の 騎 (二)	の れ の れ の れ (三)	わ が 日 本 に (四)	の れ の れ の れ (五)	大 將 と し も (六)
竹 馬	騎 馬	竹 馬	向 人	竹 馬	大 將 と し も 軍
馬 旅 行 習	下 旅 行 習	馬 旅 行 習	下 旅 行 習	馬 旅 行 習	大 將 と し も 軍
馬 旅 行 習	下 旅 行 習	馬 旅 行 習	下 旅 行 習	馬 旅 行 習	大 將 と し も 軍

○豫習曲として前の「休みの鐘」を復習すべし
○スタッカトに注意すべし特に「のれくく
ふを要す

雪達磨

三十四

(一)

尾をふりうごかし、小犬まで、
 よろこびいさめる、けさの雪、
 来よくみなこよ、いざともに、
 のき端につくらん、大達磨

(二)

炭團のまなこは、まんまろく、
 薪のくちびる、への字なり、
 見よくあれ見よ、いざともよ、
 おどろくばかりの、大達磨

演奏注意
 〇第三段第一小節及び第二小節の終りの八分音符を軽く且つ短く歌ふべし

雪達磨

快活=(♩=120)(と調四分ノ二拍子)

mf

5. 5. 1. 1. | 3. 2. 1. 2. | 3. 2. 3. 4. | 5. 0 |
 た ど ん の う ま こ は こ ま い ん ま ろ ぐ

5. 5. 3. 6. | 5. 5. 3. 1. | 2. 2. 3. 2. | 1. 0 |
 ち ろ き の い ち め る の じ な き り

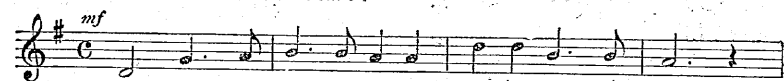
5. 5. 5. 5. 0. | 3. 3. 3. 3. 0. | 2. 1. 2. 3. | 2. 0 |
 こ よ み あ なれ こ よ い ざ と も も ニ よ

mf

1. 6. 5. 6. | 1. 1. 3. 3. | 2. 2. 5. 5. | 1. 0 |
 ノ キ と へ り ば か ら の お お は だ る ま

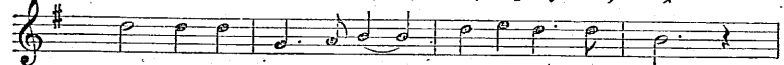
三十五

勇マシク(♩=152)(と調四分ノ四拍子)

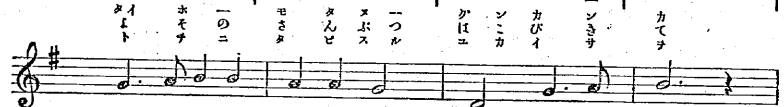


5	1	2	3	3	2	2	5	5	3	3	2	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

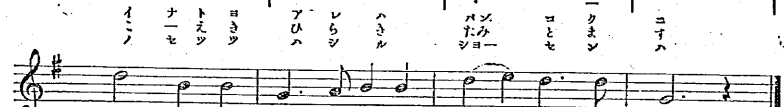
ハシマ
ホバ
フイシ
ルカ
クツミ
リツテ
プブリ
ヤンダ
ケカ
チのチ
ミにミ
ナクダ



5 - 5 5 | 1 . 2 3 3 | 5 6 5 . 5 | 3 - . 0 |



1. 2 3 3 | 2 2 1- | 5- 1. 2 | 3- 0 |


$$5 - 3 \quad 3 \quad | \quad 1 \cdot 2 \quad 3 \quad 3 \quad | \quad \overbrace{5 \quad 6} \quad 5 \cdot \quad 5 \quad | \quad 1 - \cdot \quad 0 \quad ||$$

航

海

意注奏演

特に拍節機の度数に注意し急若くは緩に失すべからず

國を富ますには國內だけの通商ではとまぬるい。せひ外國と交通貿易をしなければならぬ。これ航海の大切なわけである我國は四面海であるから子どもの時より此事を能く知らせてはげまして置きたいといふのが此歌の主意である。

いなとよいやくさうではないこと
見もしらぬ見ないこと

見もしらぬも
ない。

波 ^{なみ} を ^を け ^く や ^や ぶ ^ぶ り ^り	い ^い な ^な と ^と よ ^よ あ ^あ れ ^れ は ^は	國 ^{くに} の ^の 産 ^{さん} 物 ^{ぶつ}	交 ^{かう} 易 ^い	海 ^{うみ} を ^を 渡 ^{わた} り ^り て ^て	の ^の せ ^せ つ ^つ
大 ^{だい} 砲 ^{ぱう} も ^も た ^た ぬ ^ぬ	ゆ ^ゆ き ^き ゝ ^ゝ た ^た え ^え せ ^せ ぬ ^ぬ	(二) 産 ^{さん} 物 ^{ぶつ}	皆 ^{みな} 易 ^い ひ ^ひ ら ^ら き ^き	土 ^ち 地 ^ち に ^に 旅 ^{りょ} す ^す る ^る	實 ^{じつ} に ^に こ ^こ そ ^そ 國 ^{くに} の ^の
萬 ^{まん} 軍 ^{ぐん} は ^は	商 ^{しょう} 國 ^{こく}	つ ^つ み ^み い ^い だ ^だ し ^し	商 ^{しょう} 船 ^{せん} の ^の 民 ^{たみ}	見 ^み も ^も し ^し ら ^ら ぬ ^ぬ	商 ^{しょう} 船 ^{せん}
船 ^{ふね} は ^は	船 ^{ふね} に ^に	は ^は こ ^こ び ^び 來 ^き て ^て	と ^と ま ^ま の ^の	愉 ^{いう} 快 ^{かい} さ ^さ を ^を	寶 ^{たから} な ^な れ ^れ

時はこがね

三十八

(一)

一秒時をも、惜まむ人の、
身にぞ黄金は、つもるべき、
やよや人々、用ゐてつきぬ、
時はこがねの、母なるぞ、

(二)

たゞ時の間も、あだにすごさぬ、
人にぞほまれは、やどるべき、
やよや人々、用ゐてつきぬ、
時ははまれの、父なるぞ、

時はこがねの母なるぞ
のり來たのである。母とは西洋の格言よ
にたとへたのである。

時のまぐさのあひだ

演奏注意
○豫習曲として「日本男児」を復習すべし
○此の曲に於てスフォーザンド(＞)始めて用ゐらる
意注 即ち記號の添へられたる音符は特に強く(稍押すが如く)歌ふべきを示せり

時は黄金

愉快=(♩=132)(と調四分ノ四拍子)

三十九

5 5 5. 3 | 3 1 2 3 0 | 1 1 3. 2 | 1 7 6 5 0 |
イ チ ビ ヨー ジ フー モー ラ シ マ ム ヒ ト ノ
た だ と き の まー もー あ だ に す こ さー ん

3. 4 5. 3 6. 6 5. 1 | 2. 2 1 3 5 0 |
ミー とー ニー ゴー コー ガー ネー ハー ツー モー ルー ベー キー

5. 6 5. 5. 3. 5. 3. 3 | 2. 3 1 6 5 5 5 0 |
ヤー ヨー ヤー ヒー トー ビー トー モー チー あー テー ツー キー スー ん

5. 5 6 5 4 3 | 2 1 2 3 1 5 | 5-3 1 | 3 2 1 0 |
トー キー ハー コー ガー ネー ノー ハー ハー ナー ルー ゴー
とー きー はー はー まー ねー のー ちー ちー なー るー ぞー

進軍

四十

(一)

勇 兵 士 数 を 知 ら ず、
 な ら び な ら ぶ、 あ の つ つ さ き、
 喇叭 の ひ ゃ き、 き く も 愉 快、

タタタタタタタ、

タタタタタタタ、

(二)

勇 兵 士 千 か 萬 か、
 そ ろ ひ そ ろ ぶ、 あ の 靴 お と、
 蹶 立 つ る 塵 見 る も 活 潑、

ト ト ト ト ト、

ト ト ト ト ト ト、

足なみたしくつ、さきそろへて進み来る兵士を見るほど愉快
 活潑なものはない。我等もあのよーな勇ましい兵士になりたい
 と思はせるが此歌の注意

注意演奏
 要す
 「ラッパ」及び「カッパツ」のラッパ及びカッパは促聲に歌ふべし且つ明瞭なるを

進

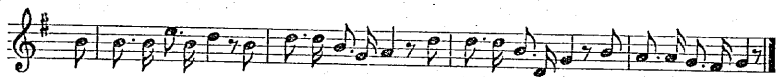
軍

勇マシタ(♩=132)(と偶四分ノ四拍子)



5 | 5. 5. 1 3 5 0 3 | 1. 1 3. 1 2 0 6 | 6. 6. 2 6 0 0 5 | 1. 1 2. 3 1 0 |

一. イ サムヘイシ カ ズヲシラズ ナ ラ ビナラブ ア ノツツサキ
 二. い さむへいし せ んかまんか そ ろひそろふ あ のくつおと



3 | 3. 3. 6. 3 5 0 3 | 5. 5 3. 1 2 0 5 | 5. 5 3. 5 1 0 3 | 2. 2 1. 7 1 0 ||

ラッパノヒビキ キ クモユカイ タタタタタタ タタタタタ
 けだつるちり み るもかっぱつ とととととと とととととと

X136.9

有所權作著

明明明明明明明
治治治治治治治
三三三三三三三
十八十五十五十五
年年年年年年年
四四四四四四四
月月月月月月月
六一五五一五一
日日日日日日日
五五訂訂訂訂訂
版版正正正正正
發發發發發
行行行行行

定價金拾錢

總者 共益商社樂器店

代表發行者 白井直

印刷者 野村宗十郎

發行所 共益商社樂器店

印刷所 東京市京橋區築地二丁目十七番地

